

《追悼 梅沢孝先生》



故 梅沢孝先生

「教師」
——梅沢孝先生を偲んで——

高 島 秀 樹

梅沢孝先生、2004（平成16）年4月4日、ご病気のためご逝去、満85歳でした。

梅沢先生には1984（昭和59）年4月、明星大学人文学部社会学科（当時）教授としてご着任いただき、1991（平成3）年3月にご退任なさるまで、7年間にわたって学科の教育と研究に大きなご貢献をいただきました。ここに誌面を

借りて、先生のご尽力に対して改めて感謝の意を表させていただきますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

梅沢先生が後に述べさせていただくように、大衆・大衆社会、現代社会の構造、そして社会学理論について独自の視点と独創的な発想による貴重な研究成果をおあげになられた、優れた

社会学研究者であることはいうまでもないことです。しかし、私の個人的な思いを述べさせていただくと、何よりも先に梅沢先生は優れた「教師」であったという思いが浮かぶことを禁じえません。それは、先生がお持ちになった生来のお人柄の故でしょうか、またご自分がお若いころから多くの困難を乗り越えて学習と研究を続けてこられた故でしょうか、さらに長く定時制高校の教壇に立たれてきわめて多様な生徒の教育や指導にあたられてきたご経験の故でしょうか。大学の学生に対してはもちろん、私のような後進の者に対してもきわめて温かな心をお持ちになり、きわめて行き届いたご指導を忘れない方でありました。学生に対しては、常に温かく見守りながら、時にはきびしく、しかしクラスのなごやかさを保ちながら、ゼミや社会調査実習のご指導にあたられたことを、先生がご指導されたクラスに所属した学生の誰もが忘れられないこととして語ります。また、私のように年齢の離れた後進の者に対しても、決して先輩ぶることはなく、研究のこと、教育や指導のあり方、またご自分のご経験など多くのことをお話いただき、そうしたお話を通じてさまざまなことを教えていただきました。大学の研究室で折々にお顔を合わせる際はもちろん、大学の帰りに当時は住まいが同方向であったことから、電車の中でもさまざまなお話をお聞きしたこと、時には研究室の若い者が先生を囲んで一献傾けながらお話をお聞きしたことなどを、懐かしく思い出します。

梅沢先生が明星大学をご退任になった後も、私は個人的に何回もお会いしてお話をしたことがあります。当時の私の住まいと先生のお住まいのいずれにも近い街のホテルの喫茶室がいつもお会いする場所でした。お会いするたびにケーキとコーヒーで、明星大学や学科、先生方の様子などをお話し、先生からは当時まだ非常

勤として出講されていた日本大学や学科の様子、さらに先生のご研究のことや時にはご家族のことなど、長時間お話をお聞かせいただくのが常でした。先生は長年にわたって現職を退いた後の恩師馬場明男先生（元日本大学・明星大学教授、故人）のお宅を定期的にお訪ねになっているという大変温かき恩師思いのお気持ちをお持ちになった方でありましたが、その時々にお会いした馬場先生のご様子などもお聞かせいただきました。先生ご夫妻はお仕事をお持ちであったお嬢さまのお子さんのお相手をされることが多かったようで、「老夫婦で幼い孫のお相手をするのは大変だ」といったお話をなさりながらも、そのお顔は大変うれしそうで、まさに先生の温厚なご性格、「良きオジイサマ」ぶりが表れているようにお見受けしていました。そのころ既に先生はご病氣をお持ちで病院に定期的に通院されていたようでしたが、その通院の道筋に私達の共通の恩師であった「銅直」という数少ない姓と同姓の表札を掲げたお宅があって、「一度訪ねて、その出身地などについてお聞きしてみたいと思っている」とお話になっていたこと、そのお話をお聞きして先生の何事にも対する探究心の表れ、お年を召されても衰えない知的好奇心に敬服したことを今もはっきりと覚えています。梅沢先生は、先生のお書きになった論文の抜き刷りや、入手された私の研究領域に近い論文の抜き刷りなどを下さり、無言のうちに研究を続け、論文を発表すること続けるように教えて下さいました。また、当時は若さの故か、ややもすると学生に対して厳しく接しがちであった私に学生指導のあり方などについてご自身のご経験を通じてお話いただいたことも、私が梅沢先生にお教えいただいたこととして忘れられないことの一つです。

梅沢先生は1918（大正7）年10月25日、東京

府（当時）のお生まれで、目黒町立烏森小学校（尋常科）を経て、目黒町立中目黒尋常高等小学校（高等科）を1933（昭和8）年にご卒業されると、直ちに通信省経理局監査課に給仕としてご勤務になりました。しかし、向学の念に燃えて、お仕事を続けながら法政大学付属工業学校（電気科）、次いで東京市立九段中学を卒業され、卒業と同時に1938（昭和13）年から通信省電気局の事務員とされました。その後日本車輛株式会社に一時お勤めの後、1944（昭和19）年から神奈川県立平塚工業学校に、1948（昭和23）年からは神奈川県立川崎工業高等学校に書記としてご勤務されました。ご生前に先生からお聞きしたお話では、ここでのご経験から教育に対する熱意を一層強くお持ちになられたとのことで、1948（昭和23）年に日本大学高等師範部（公民科）に改めてご入学され、1951（昭和26）年に教員の免許を取得されて卒業されました。そして、翌1952（昭和27）年からは、いよいよ神奈川県立川崎工業高等学校定時制の教壇にお立ちになられ、生徒の教育に力を注がれるようになりました。お仕事を続けながらも先生の向学心、研究心はますます強いものとなられたようで、1951（昭和26）年には日本大学文学部社会学科にご入学、ご卒業後はさらに1954（昭和29）年に日本大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程に進まれ、研究を続けられました。大学院修了後、1956（昭和31）年から1959（昭和34）年までは、恩師である故馬場明男先生のご推薦も得て日本大学の助手をお勤めになりましたが、やはり梅沢先生のお気持ちは定時制高校の教壇から生徒を教育・指導されることに残されていたようで、再び1959（昭和34）年から1974（昭和49）年までの長きにわたって、神奈川県立川崎工業高等学校定時制にご勤務されました。この間、戦中戦後の動乱期に様々な困難に直面しながらもお仕事と学習・研究に励

まれた先生のご様子、また当時の定時制高校に学ぶ生徒達の様子など、決して多くはお話になりませんでしたが、少しずつお話いただく中から戦後生まれの私などには想像できないような数多くのことを教えていただき、様々なことを学ばせていただきました。先生のご研究の成果と教育に対するご熱意は、やがて多くの方の認めるところとなり、1974（昭和49）年には母校日本大学文理学部社会学科に専任講師として招かれました。さらに日本大学では助教授とされましたが、1984（昭和59）年には明星大学においていただき、人文学部社会学科（当時）において学生の教育・指導に、ご研究に、そして私達後輩のご指導にと大きな力を発揮していただきました。

梅沢先生は別掲のご業績目録からも理解できるように、現代社会の様々な側面とそれを明らかにする社会学理論・社会学的方法論についてのご研究を展開されてきましたが、その中で一貫して研究の中心的なテーマとされてきたのは、大衆・大衆社会に関するご研究であったと考えられます。先生はその研究活動の最も初期にあたる1955（昭和30）年2月に日本大学社会学研究室の紀要である『社会学論叢』第2号に発表された「マス・ソサエティと大衆」論文を出発点として、この領域に関してのご研究を続けられ、多くの論文や学会発表を積み重ねてこられました。それらを集大成して1987（昭和62）年5月に、『大衆の社会学—民衆の大衆論の構築—』と題する9章294頁からなる著書を刊行されました。先生の基本的なお立場は、「大衆社会学—学」すなわち大衆社会の社会学的な解明を目指すものではなく、「大衆—社会学」すなわち大衆の社会学的解明を目指すものであると、常々私にはお話して下さっていましたが、そうした独自の学問的な立脚点はこの著書にきわめ

て明確に示されていると理解することができません。

梅沢先生はこの著書の「序論」において、「戦後日本の現代社会論は、近代化論、大衆社会論のあと、六〇年代あたりから産業社会論、ポスト産業社会論が論議されてきたが、最近ふたたび大衆および大衆社会論が論ぜられるようになってきた。」と研究動向を総括された上で、ふたたび注目され始めた大衆論、大衆社会論においては日本社会の新しい社会状況についての分析は見られるものの、議論の理論図式はいぜんとして過去のものと同じような、(1)実在大衆概念 対 機能大衆概念と、(2)評価的大衆概念(貶価の側面も一部含んだ) 対 貶価の大衆概念 という対立図式に陥っていて、議論が進展していないとされ、それは(1)の対立状況に起因するとの考えを示しています。それゆえ「まずこの概念の対立を整理して、議論を進めるならば、(2)における分裂的な、相互に噛み合わない非生産的論争状況から一步前進できるのではないか。そこに隔靴搔痒的な論議の対立を止揚できる総合的な大衆・大衆社会論が構築できるのではないだろうか。」との基本的提言をした上で、そのような問題意識に立って、より具体的な考え方として『民衆的大衆論』を提示してきたし、また改めて一書にまとめて提示しようとするのである。」という、先生の年来の基本的なお立場を明示されています。そしてその「民衆的大衆論」は実在大衆概念であり、基本的に評価的な大衆概念であり、広義の階級的大衆概念である、と示されています。さらにこの「広義の階級的大衆概念である」との点に関しては、「通説の大衆・大衆社会論が、無階級社会、階級溶解社会を前提として主張されていることを十分に承知したうえで、あえてそれへの批判として主張するのである。」ときわめて明確に自らの基本的な考え方について断言されて

います。ここに、先生の基本的な立脚点がきわめて的確に示されていると理解することができます。こうした先生のお考えは、また別の箇所では、民衆的大衆論は「实在概念としての大衆論であり、マス化社会における大衆(masses)のダイナミックスと、その大衆の動向の基盤に乗っている大衆社会(masses society)論の提示である。」と示されています。さらに、別の箇所では「大衆論は、マス論をも含めた、現代社会における階級・階層論である。」とも記されており、それゆえこのご著書にも「このような見解を明示して、通説的誤解を避けるために、『民衆的大衆論の構築』という副題をつけた。」「つまり本書は、現代史における歴史的個体としての『大衆』(masses)概念を提示しているのである。」と説明されています。こうした考え方に立って、以下の7章が提示されています。

第二章 現代社会の階級構造

第三章 エリート理論とファシズム

第四章 エリート・マスの理論

第五章 マス社会論批判

第六章 大衆の社会学的考察

第七章 大衆論の展開 I

一新中間階級論の今日的課題一

第八章 大衆論の展開 II

一官僚制と市民参加一

この構成に示されるように、先生は大衆・大衆社会の解明にあたって、階級構造、エリート・マスについての考察から出発され、さらに従来のマス社会論を批判的に検討された上で、ご自身の大衆に関する社会学的考察を提示されるという、自らの理論的立脚点に忠実で、かつきわめて周到な研究の手法を採用されています。こうした検討を経て、全体の結論とも言うべき「第九章 大衆・大衆社会論の新しい流れ」を提示されていますが、そこでは「民衆的大衆論は、このような大衆レベル・アップを基本にも

つ主張であるが、以下それが内含する提案とその論拠の概要を述べて結びのことばとしよう。」として、次の4点を示されています。

1. 民衆的大衆論は、社会的事象の歴史的把握を提案している：大衆は、歴史的展開段階のうちで、どのような位置を占めている現代社会の中における事象なのか、を究明すべきである。
2. 民衆的大衆論は、現代過渡期社会における行為主体についての提案をしている：現代過渡期社会における民衆である大衆は、新しい社会的価値を求めて、現代産業社会に少なくとも違和感を抱き、抗議し、抵抗する趨勢にあると思われる。
3. 民衆的大衆論は、「資本主義社会と大衆」という総合的把握の提案をしている：現代社会は「資本主義産業社会」という二重構造的把握をすべきであり、その中で大衆を「行為主体」として総合的に把握すべきである。
4. 民衆的大衆論は、人類史を精神的存在である全ての人間の主体性確立への過程として捉えるべきであることを提案している：大衆は全民衆史の十九世紀に始まる現代社会の事象であり、その趨勢は疎外克服へのレベル・アップ志向をもつ存在と考えている。

ご著書の随所に表れるお考え、またこのまとめに如実に示されている内容などから考えますと、先生が大衆・大衆社会のご研究について独自の研究視角をお持ちであったということは言うまでもないことですが、それと同時に先生のお考えの底流には大衆に対する肯定的な評価、大衆への信頼、大衆への温かいお気持ちが存在していたように感じられてなりません。それが先生のお人柄や、それまでのご経験にどこかで

結びつくのではないかと考えるのは、私のあまりにも偏った思い込みの結果によるものでしょうか。

近年、ふたたび日本社会における階級・階層構造が注目され、階層構造が固定化しつつあり、階層構造の拡大再生産が進行しつつあるのではないかという考え方が社会調査の結果もふまえて提起され、その点をめぐって社会学の領域で佐藤俊樹、盛山和夫、山田昌弘ら、教育社会学の領域で荻谷剛彦らを先頭に多くの研究者の間で議論が盛んになっている状況を見ますと、今こそ梅沢先生の階級・階層構造理論に基礎を置き、歴史的展開をも踏まえた、「民衆的大衆論」が真剣に検討されなければならない状況にあるのではないかと考えられます。しかし、残念ながら今はもう幽明境を異にした先生に直接お教えいただくことはできません。残された後進としては、梅沢先生のお残し下さったご研究の成果に学び、研究を続けていくことだけが、先生のお気持ちにお応えすることのできる一つの道であると考えています。また、先生にお教えいただいた多くのことを生かして、学生の教育・指導にあたっていくことが、教師でもある大学教員の勤めであると考えています。

梅沢先生どうか安らかにお休み下さいとお祈りするとともに、いつまでも私達をお見守りいただき、お導きいただきますことをお願いいたします。

合掌

2005年1月16日

(たかしま ひでき、本学科教授)

梅沢孝先生 略年譜

1918（大正7）年10月25日	東京府（当時）生まれ
1933（昭和8）年3月	東京府目黒町立中目黒尋常高等小学校高等科 卒業
1933（昭和8）年4月	逓信省経理局監査課 勤務
1936（昭和11）年3月	法政大学付属工業学校電気科 卒業
1938（昭和13）年3月	東京市立九段中学校 卒業
1938（昭和13）年6月	逓信省電気局 勤務
1943（昭和18）年11月	日本車輛株式会社 勤務
1944（昭和19）年5月	神奈川県立平塚工業学校勤務（書記）
1948（昭和23）年4月	神奈川県立川崎工業高等学校勤務（書記）
1951（昭和26）年3月	日本大学高等師範部公民科 卒業
1952（昭和27）年3月	神奈川県立川崎工業高等学校定時制勤務（教諭）
1953（昭和28）年3月	日本大学文学部社会学科 卒業
1956（昭和31）年3月	日本大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程 修了
1956（昭和31）年4月	日本大学文理学部社会学科助手
1959（昭和34）年4月	神奈川県立川崎工業高等学校定時制勤務（教諭）
1974（昭和49）年4月	日本大学文理学部専任講師
1977（昭和52）年4月	同 助教授
1984（昭和59）年4月	明星大学人文学部社会学科教授
1991（平成3）年3月	同 退職
2004（平成16）年4月4日	逝去（享年 85歳）

学会所属 日本社会学会
 関東社会学会
 日本社会史学会
 経済社会学会

梅沢孝先生 著作目録(抄)

著書・論文名	発表年月	発表誌名・発行所等
Institutional GroupとInstitutionalized Groupについて	1954（昭和29）年12月	『日本大学文学部研究年報』第4輯
マス・ソサエティと大衆	1955（昭和30）年2月	『社会学論叢』第2号

- 大衆現象をめぐる若干の問題 1956（昭和31）年11月 日本社会学会（発表）
- 大衆社会における階級 1957（昭和32）年10月
関東社会学会（シンポジウム報告）
- 大衆の序説的考察 1958（昭和33）年4月 『社会学論叢』第10号
- 大衆の序説的考察（二） 1959（昭和34）年4月 『社会学論叢』第12号
- 『現代社会科学の思想と方法』（共著） 1962（昭和37）年11月 コロナ社
- 「エリートとマスの理論」について 1973（昭和48）年12月 『社会学論叢』第58号
- ファシズムの社会学について 1975（昭和50）年3月
日本大学人文科学研究所『研究紀要』第17号
- 高度産業社会における階級構造論のための一提案 1975（昭和50）年11月
馬場明男博士古稀記念論文集『現代社会学論叢』時潮社
- 社会現象における構造原理の二重性 1976（昭和51）年10月 日本社会学会（発表）
- コーンハウザーの「全体主義社会」論 1976（昭和51）年12月 『社会学論叢』第67号
- 「新中間層」論の今日的課題 1978（昭和53）年7月 『社会学論叢』第72号
- 「新中間層」論の今日的課題（二） 1979（昭和54）年12月 『社会学論叢』第76号
- 「市民社会－大衆社会」論の再検討 1980（昭和55）年9月 日本社会学会（発表）
- 『多重化する社会と産業』（共著） 1980（昭和55）年12月 新評論
（「大衆論の展開－官僚制と市民参加－」執筆）
- 「公衆社会－大衆社会」視角の再検討 1981（昭和56）年3月
日本大学人文科学研究所『研究紀要』第25号
- 『現代社会の変動論』（共編著） 1981（昭和56）年4月 新評論
（「現代社会の構造」「社会学の歴史」執筆）
- 日本社会の高齢化と階級・階層構造の変動
一雇用慣行変動視角からの分析一 1983（昭和58）年7月 『社会学論叢』第87号
- 日本社会の高齢化と階級・階層構造の変動
一雇用慣行変動視角からの分析一（二） 1983（昭和58）年11月 『社会学論叢』第88号
- 現代社会の領域論的分析視角試論
一現代社会論の位置づけ一 1985（昭和60）年3月
『明星大学社会学研究紀要』第5号
- 社会的水準の概念枠組と構造諸理論 1986（昭和61）年3月
『明星大学社会学研究紀要』第6号
- 『大衆の社会学－民衆の大衆論の構築』 1987（昭和62）年5月 明星大学出版部
- 社会構成試論 1987（昭和62）年12月 『社会学論叢』第100号
- 現代社会論と過渡期的思想
一批判と展望一 1990（平成2）年12月 『社会学論叢』第109号
- 大正デモクラシーと社会学

—米田社会学と日本大学社会学科の創設—

1991（平成3）年12月 『社会学論叢』第112号

芥川さんの思い出

1992（平成4）年2月

『専修大学人文科学研究所月報』第145号

社会概念の四つの側面と二つの基軸について

1991（平成4）年3月

『明星大学社会学研究紀要』第11号

社会統合システムの形成

—「生活共同体」の2つのシステムについて—

1993（平成5）年6月 『社会学論叢』第117号

注1：梅沢孝先生が明星大学就任時に記載提出されたものに、その後の業績を追記して作成した。

記載されていない業績がありうることをご了解いただきたい。

2：著書・論文中、『 』を付したものは単行本を表す。